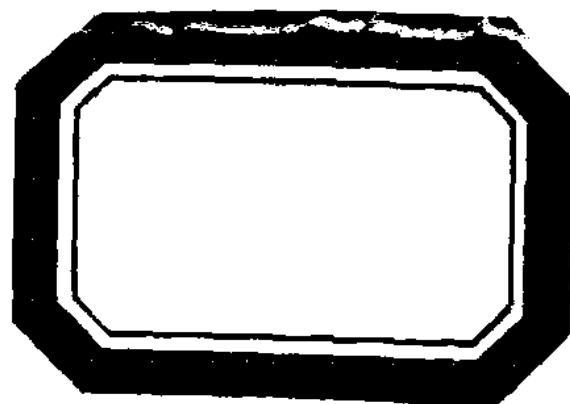


ドナウの旅人 (上)

宮本輝

新潮文庫





ドナウの旅人^{たびしゅ}(上)

新潮文庫

み-12-3



昭和六十三年六月二十五日 発行
平成四年四月三十日 十 刷

著 者 宮 本 輝^{きよ}

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 営業部(〇三)三二六六―五一
編集部(〇三)三二六六―五四四〇

振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社 大進堂

© Teru Miyamoto 1985 Printed in Japan

ISBN4-10-130703-2 C0193

新 潮 文 庫

ド ナ ウ の 旅 人

上 卷

宮 本 輝 著

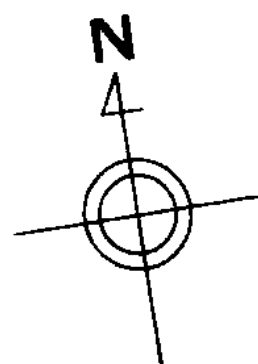
新 潮 社 版

目次

雨	の	岩	九
牧	歌	三十四	
黄	昏	の	三五
追	跡	三九一	

ポーランド

ソヴィエト



ハンガリー

ルーマニア

ケレビア

フィサード

トルチャ

スリナ

ヘオグラード

テキヤ

クラドヴォ

ブカレスト

メジディア

コンスタンツァ

ネゴティン

ヴィディン

ルーセ

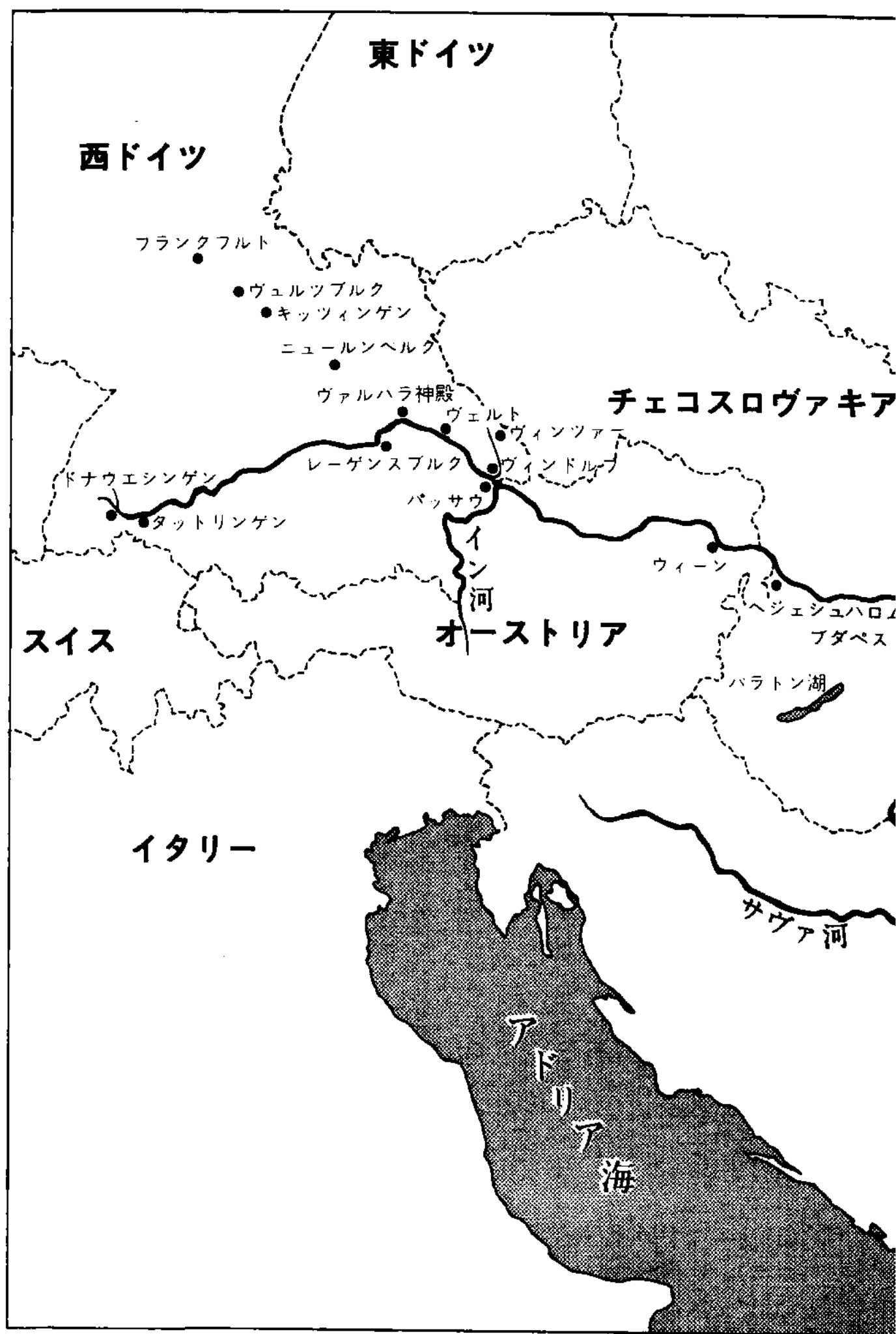
ドナウ河

黒海

ユーゴスラヴィア

ソフィア

ブルガリア



ド
ナ
ウ
の
旅
人
上
巻

雨の砦^{とりで}

目を醒ますたびごとに、夜が明け始めていた。眼下にはアラスカ半島が雲の切れめから見え、薄紅色や淡い水色を、眩い雪原のあちこちから放っていた。蛇行する無数の川は銀色に光っていたが、どうかしたひょうしに、もつれた赤い糸みたいに染まって、麻沙子は、川が地球という生き物の血管であることを、朦朧とした精神のどこかで妙にはつきりと感じた。

麻沙子はたった三時間ほどのあいだに、五回も、昇りかけている朝日を目にしていた。成田空港から北廻りでデンマークのコペンハーゲンへ飛び立ったのは、夜の十時過ぎであった。予定より四十五分遅れて離陸した飛行機の窓際の席につくと、スチュワーデスに赤ワインの小壺を持って来てもらい、それを飲み終えてすぐ眠りについたのである。けれども、機内にはアメリカ人らしい団体客が乗り合わせていて、他の乗客たちの迷惑そうな視線などまったく意に介さず、大声でふざけあったり、ウイスキーをラップ飲みしながら歌をうたったりした。その中の、ひとりの肥った中年の女は、離陸して、シートベルト着用のランプが消えるとすぐ立ちあがり、通路に立ちつくしたまま大きな身ふりで延々と六時間近く喋りつづけて

いた。おかげで麻沙子の眠りは浅く、その女の話し声は、絶えず何かの呪文じゅもんのように、張りつめた神経を刺してきた。

あと二十分でアンカレッジに着陸するという機内放送があった。麻沙子は腕時計を見た。十六日の午前四時だったが、実際は日付変更線を過ぎたから、十五日の午前九時ごろなのであった。コペンハーゲン空港で四時間待って、飛行機を乗り換え、それから西ドイツのフランクフルトまで行かねばならぬ。そしていつときも早く、母の絹子をみつけたさなければならぬのだった。もう一日早く絹子からの手紙を手にしていれば、成田からフランクフルトへの直行便のチケットがとれたのに……。そう思うと、麻沙子は胸から下を包んでいる薄い毛布の端をひきちぎりたいほどにいらいらしてきた。

ベトナム人らしい三、四歳の女の子が通路を走って、麻沙子の座席の傍そばで転んだ。金髪の若い夫婦が追いかけて来て、泣いている女の子をあやしながら抱きあげた。北欧系の顔立ちの夫婦は、麻沙子と目が合うと、いかにも困ったという表情で笑った。

「お嬢さんですか？」

麻沙子は英語で訊きいた。ふたりは英語が解せないようだった。それで麻沙子は、同じ言葉を、こんどはドイツ語に変えた。

「ええ、娘ですわ。私たちの」

ジーンズを穿はいた妻のほうが答えた。

「いつからですか？」

麻沙子は微笑^{ほほえ}みつつ訊いた。

「この子が生まれる前から」

こんどは夫のほうが太い澄んだ声で言った。

ふたりは、シートベルト着用のランプが灯^{とも}つたのを見て、自分たちがスウェーデン人であることを訛^{なま}りの強いドイツ語で早口に麻沙子に教え、席^{もど}に戻^{もど}って行^いった。ベトナムの難民孤児を養子にするため、遠い東南アジアまで出向^いて行^いったのであろうスウェーデン人夫妻の美しい金髪を、麻沙子はいつまでも見ていた。

麻沙子は、つい二十日ほど前に停年退職し、新しい就職先に入社するまでの短い休暇を、盆栽いじりですごしている父の顔を思い浮かべた。そして、父は、母が極秘のうちにヨーロッパ旅行に旅^いだつたその真の理由が、自分と離婚するための布石であることにまったく気づいていないのを哀^{かな}しい心で思^{おも}いやつた。

アンカレッジ空港で、麻沙子の乗^のつたスカンジナビア航空機が給油や整備、搭乗員^{とうじょういん}の交代などを終えて再び離陸するまで、一時間とちよつとあつた。麻沙子は洗面室で顔を念入りに洗^あい、化粧を整え、髪をブラシで丁寧^{ていねい}に何度^{いくばく}も梳^すいた。アンカレッジ空港はアメリカ合衆国であるのに、免税店には日本語のポスターや値札が張りめぐらされ、売り場の店員の殆^{ほとん}どが日本人だつた。なかには、エスキモーも混じっているのだが、日本人と区別^{くべつ}がつかなかつた。フロアには、そばやうどんの立ち喰^ぐい所まであつて、麻沙子はアンカレッジ空港の中に一歩足を踏み入れるたびに、そこが日本でもなく異国でもない、奇妙な場末のマーケットで

あるかのような錯覚にひたり、いつもひとりで、免税店のコーナーからかなり離れた待合所の椅子に坐つて、離陸までの時をつぶすのだった。彼女は化粧室から出ると、待合所の端まで行き、夜明けの空港に点在するアメリカの軍用機に目をやっていたが、やがてハンドバッグから、二通の航空便を出した。母の絹子がフランクフルトから出したもので、一通は夫である日野修三宛に、一通は麻沙子宛に書かれていた。修三宛の手紙にはこうしたためられてあった。

——わがままお許し下さい。きょうフランクフルトに着きました。いつかひとりで外国をゆっくり旅行したいと思っております。ご相談しなかったのは、きっとお許しが出ないだろうと思つたからです。お金がつづくかぎり旅をつづけるつもりですので、いつ帰国するかわかりません。費用のことでは、決してあなたにご迷惑はおかけしません——。

そつけないといえ、じつにそつけない文面であつた。どこかに、三下り半を突きつけているのを感じさせるところがあつたが、修三は、そんな文章や言葉の奥にしづめられているものを嗅ぎ取る能力に欠けていたから、狐につままれたような表情で、

「あの馬鹿、何考えてやがる」

と言つて、手紙を食卓の上に放り投げただけだつた。

「お前には何て書いてきたんだ」

と訊かれ、麻沙子はなにくわぬ顔で、

「まったくおんなじことよ。一字一句違わないわ。それだつたら、なんにも二通出さなくても

いいのね」

そう答えたが、本当は、麻沙子宛の手紙には、まったく別のことが書かれていたのである。――きょう、フランクフルトに着きました。麻沙子がひとりで五年間も暮らしたフランクフルトに。夜に着いて、そのまま空港からタクシーでホテルに直行しましたので、街のたたずまいはまだよくわかりませんが、タクシーの窓から道行くドイツ人を見て、ああ、麻沙子は五年間も、こんな異国でひとり暮らしていたのかと思いました。いろんな寂しいこともあったでしょうに、よく五年間も頑張^{がんば}れたものだ、少し自分の娘を尊敬してしまいました。麻沙子が日本にいなかった五年のあいだ、私はもう二十数年間もひたすら考えつづけてきたことを、じっくりと考え直し、結論を出して心を定めてしまいました。お父さんが停年になったら、それを機に、離婚しようと思ったのです。いつそのことをきりだそうかと迷っていったとき、たまたまテレビにドナウ河が映り、サラサーテのツイゴイネルワイゼンの曲が流れました。ほんの三分か四分のあいだでしたが、私は、憑^つかれたように、ああ、いまテレビに映っているこの場所に行ってみたいと思いました。

三十余年もつれそってきたお父さんと別れたいという私の気持も、ヨーロッパの国々を縫って流れるドナウに沿って旅をしてみたくなった気持も、麻沙子にならわかってもらえそうな気がします。どうか心配しないで下さい。ドナウの源流から、それが黒海へ注ぎ込む終着点まで、たつぷりと時間をかけて旅をするつもりですが、どこかで寂しくなると、慌^{あわ}てて日本へ帰ってしまうかもしれないし、予定よりも長く、お金がつづく限り旅をつづけるかもし

れません。いずれにしても、ドナウ河のほとりのホテルで（それが西ドイツになるかオーストリアになるか、あるいはハンガリーになるかはまだわかりませんが）、心をこめて、お父さんに自分の意志を伝える手紙を書くつもりでいます。ですから、麻沙子からは断じてこのこと、お父さんには内緒にしておいて下さい。どうかくれぐれも心配しないで。それではまた――。

絹子は、女学校時代の友人四、五人と北海道を旅行してくる、十日間の予定だが二、三日帰りが遅れても心配しないようにと言って家を出たのである。真夏のひどく暑い日でも、外出するときは絶対に和服で押し通してきた絹子が、洋服の上に、いつのまに買ったのか毛の衿（えり）のついた高価なコートを着て足早に玄関を出て行ったとき、麻沙子は一瞬不審なものを感ぜはしたが、どうぞいつてらっしゃいませと幾分揶揄（やゆ）のこもった口調で送り出して、たいして気にもせず自分の部屋で仕事を始めたのだった。

大学を卒業してすぐに西ドイツへ行き、重機械に使用する特殊部品のパテントを持つ八木俊介（しゅんけい）と現地人とが共同出資でおこした会社の秘書として五年間働いた麻沙子は、もういいかげんに日本に帰ってこいという両親の強い要望で帰国し、身につけた語学をいかして、小さな商社の独文の書類を作成する仕事を得た。嫁いだ姉の部屋を事務所にして、そこに仕事用の電話もひき、少しずつ得意先もふえてきていた。

タイプ紙で百二十枚にもなる面倒でややこしい書類を作るのに追われ、麻沙子は母の北海道旅行のことなどすっかり忘れてしまっていた。そしてなんとか約束の期日までに書類を仕

上げ、それを発注先に届けて帰宅したとき、郵便受けの中の、二通の航空便を目にしたのである。

その夕方、麻沙子は六本木のマンションに住んでいる姉の希世子に電話をかけ、喫茶店で待ち合わせた。電話では、ただ急いで相談しなければならぬ事態が発生したから、とだけ伝えた。義兄にはまだ知られたくなかったからであった。そのときすでに、麻沙子は、すぐにもフランクフルトに飛び、母をみつけだして断固日本に連れ帰る決意を固めていた。ドナウに沿って旅をすることが判^{わか}っているのだから、みつけるのはそんなに困難ではないだろうと考えた。

姉の希世子は、麻沙子宛の手紙を読み終えると、意外に平然と言った。

「とうとうやったって感じね。お母さん、本気よ」

「本気って、何が？」

「お父さんと離婚するってこと。私、四、五年前からそんな予感がしてたの」

「私、そんなこと絶対させないわ」

「私だって、そんなふうになってもらいたくないけど、お母さんから離婚したいって手紙が届いたら、お父さん、了承すると思うわ」

「どうしてそう思うの？」

「お父さんねエ、いつか私に、こう言ったことがあるのよ」

姉の希世子は、夫の帰宅が気になるのか、喫茶店の壁にかかっている時計にときおり視線